

目に見えない恐怖への祈り

## 勧請縄と茅の輪くぐり

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、国内外で「ステイホーム」すなわち「外出を避け自宅ですす」に象徴される社会的な距離の確保をあらゆる場所で余儀なくされていきます。医療の発達した現代においてすら未知なる目に見えない恐怖への対抗に、人類の英知の結集が急務となっています。

では、医療の未発達であった時代は、どのように対応していたのでしょうか。当時の人々は、さまざまな祈りでその難から逃れようとしてきました。そしてそれらの行事は、現代に生きる私たちにも受け継がれています。今回は、その行事のいくつかを、『近江八幡の歴史』第3巻「祈りと祭り」の記載内容を中心に紹介していきます。

まず、新年に行われるのは

「勧請縄」（かんじょうなわ、ところによってはかんじんなわ）です。これは、疫病や災いが入るのを防ぐため大きな注連縄しめなわを、集落の入り口や主要な道に掛ける行事です。邪悪なものが入らないようにするため、注連縄の中央には「トリクグラズ」と呼ばれる魔除けをイメージする呪具しゅぐが取り付けられます。武佐町の勧請縄につけられたトリクグラズは「オニの顔」と呼ばれ、ヒノキの枝と葉で作った輪に角を表すトチノキの枝が2本



武佐町の勧請縄

飾られています。

また、旧暦の6月晦日には「夏越しの祓え」という行事が各地で行われます。これは一年の後半の健康と厄除けを祈願するものです。梅雨の時期に入り、長雨や洪水、高い湿度による流行り病はやりが起りやすいことから、さまざまな儀式で身を清め、心身ともに健康に「夏」を迎え、無事に難を乗り「越」していくためにこのような行事が行われてきたのです。

夏越における清めの儀式の集大成といえる儀式に「茅の輪くぐり」の行事があります。茅（ちがや）の輪には、それを腰に着けた者とその家族のみ疫病から難を逃れたという伝承があり、やがて、茅で作られた大きな輪を潜り抜けることで心身を清めることができる祓えの行事



沙沙貴神社の「夏越の大祓」

に展開したと考えられ、この行事は全国各地で行われています。第3巻「祈りと祭り」では、旧近江八幡市の事例として、日牟禮八幡宮や池田町の正栄寺、中村町の荒神社の茅の輪くぐりを紹介していますが、旧安土町域で行われるのが沙沙貴神社の「夏越の大祓」です。琵琶湖岸で刈り取ったヨシとマコモで大きな輪を作り、6月の最終日曜日と30日に無病息災を祈念した神事が行われます。なお、他の神社・寺院でも、茅の輪はヨシとマコモで作られています。

！ 新型コロナウイルス関連の情報は、市ホームページをご覧ください

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、催しが急に中止になることがあります。開催されるかどうかは事前に担当課または主催者へご確認ください。また、市の各施設は臨時閉館を行っている場合があります。

最新情報は、市ホームページ [URL https://www.city.omihachiman.lg.jp/](https://www.city.omihachiman.lg.jp/) で随時発信しておりますので、ご確認をお願いします。

人口と世帯 令和2年5月1日現在  
( )は前月比

総数 82,212人(+194)  
男 40,430人(+116)  
女 41,782人(+78)  
世帯 34,233世帯(+178)

※外国人住民(44カ国・地域/1,550人)を含みます。